

# わたしは「ふつう」やけど 8月号 ～「こころの扉」を少し開いてみませんか～

夕食時、親が子どもに「ご飯はどのくらいいる?」と尋ねたら、「ふつうでいいよ」と答えました。すると親が「ふつうって、どのくらい?」と再び尋ねました。「だから、ふつうだよ」と子ども。「ふつうじゃ、わからないよ」と押し問答。結局、子どもが自分ですることに。考えてみると「ふつう」という言葉が指すものは、人によって違い、かなりあいまいです。このような事例であれば笑って済むかもしれませんが、次のような場合はどうでしょうか。

何人かで雑談をしていた時、Aさんが同性愛者について差別的なことを言いました。それに対して「そういう言い方はよくないと思

う。性の在り方は様々なだから」と言ったところ、Aさんに「もしかして、あなたも同性愛なん?」と聞かれたので、「ちがうよ、私はふつうやけど」と答えました。

※出典「差別原論へわたし」のなかの  
権力とつきあう「好井裕明 著より

読んでみて、何か気になる点はなかったですか。「私はふつうやけど」はどんな人、どういったことを言い表しているのでしょうか。この「ふつうやけど」は異性愛者が「ふつう」で、同性愛者は「ふつうでない」ということをほめかしています。つまり「私」は無意識のうちに同性愛者に対して偏見を持っていったこととなります。このように、普段何気なく使っている「ふつう」には、自分の基準に合わないものを排除しようとする差別性がない

ひそんでいるのです。差別意識は、誰もが無意識のうちに持ちかねないものです。そうならないためにも、今一度「ふつう」を使ってしまった時の自分を振り返ってみませんか。

